

ロトコール変更無しで試験継続予定である。

#### 14 造血器腫瘍に対する自己末梢血幹細胞移植併用大量化学療法の治療成績—自験例の解析

土山準二郎(長岡中央病院  
内科)

【緒言】自己末梢血幹細胞移植を併用することにより、予後不良の造血器悪性腫瘍に対し大量の抗腫瘍剤を安全に投与することが可能となった。演者は16例の造血器腫瘍患者に自己末梢血幹細胞移植併用大量化学療法を行いその治療効果を検討したので報告する。

【方法】対象は1996年11月より2000年8月の間に担当した患者16名で、年齢中央値54歳(28-75)、男性8例、女性8例。疾患は悪性リンパ腫11例、急性骨髄性白血病3例、急性リンパ性白血病2例。移植時完全寛解13例、部分寛解3例であった。移植前治療は、悪性リンパ腫にたいしてMCEC、ICE、又はMEC療法を、急性骨髄性白血病ではG-BEA療法を、急性リンパ性白血病ではBEC療法を行った。

【結果】移植された末梢血CD34陽性細胞の中央値は $7.3 \times 10^6/\text{kg}$ (2.0-80)で、ANC>500は中央値10日(7-13)、PLT> $2 \times 10^4$ は11.5日(9-19)であった。移植後の合併症は粘膜障害が多数例で、発熱は少数例で経験されたが、いずれも保存的治療や抗生剤の投与でコントロール可能であった。移植関連死はみとめなかった。DFSは中央値19ヶ月(2-49)、OASは中央値24ヶ月(3-49)と良好で、従来の治療法と比較して予後改善効果が十分に期待できるものと思われる。

#### 15 当院における非ホジキン悪性リンパ腫の治療成績

藤原 正博・曾我 謙臣(長岡赤十字病院)  
小池 正・黒川 和泉(内科)

昭和62年5月から平成9年4月までの10年間に当院血液科に入院して治療を受けた非ホジキンリ

ンパ腫患者のうち、転帰が明らかな110例について解析をした。CHOPあるいはMACOP-B療法が行なわれ、完全寛解率は61%、全症例の8年生存率は43%であった。年齢および臨床病期による差が大きかった。平成10年以降はG-CSF併用biweekly CHOP療法を標準療法とした。3クール終了時の評価でCRならばさらに3クールを追加して全6クールで終了、PRならば6クール終了時に再評価をし、その時点でCRならば2-3クール追加して終了。病変が残存している場合には他の治療法を考慮することとした。現在まで10例の患者に施行され、8例にCRが得られ、2年生存率は70%と、比較的良好な成績が得られている。

#### 16 当科における小児悪性リンパ腫の治療成績—CCLSG NHL 960 protocol 治療例を中心に—

小川 淳・片岡 哲(県立がんセンター)  
浅見 恵子(新潟病院小児科)

1983年から2001年の間、当科において小児癌・白血病研究グループ(CCLSG)のグループスタディに登録の上治療した非Hodgkinリンパ腫(NHL)患児は35名である。1996年までの治療例(NHL 8201, 855, 890 (n=26))のEFSは66.5%、1997年からの治療例(NHL 960 (n=9))のEFSは88%である。再発した1例は縦隔原発のリンパ芽球型リンパ腫の男児例で治療開始後4ヶ月に中枢神経再発を来し同種造血幹細胞移植を2回施行したにもかかわらず睾丸、骨髄にも再発して原病死している。今後このような予後不良例を病初期より選別して強化したプロトコールにより治療することにより成績の向上が得られると考えている。

#### II. 特別講演

##### 「悪性リンパ腫に対する標準的治療の動向」

東海大学医学部 血液リウマチ内科

堀田 知 光